

1. 委員会研究テーマ

『「自ら動き出したくなる授業の創造」

～感じ・思い・考え・判断して、課題解決していける子ども～』

2. 研究内容

(1) 公開研究授業

期日：平成 24 年 11 月 7 日(水) 授業学級 豊丘小学校 1 学年 授業者 山崎絵美先生 指導者 森上小学校教頭 上野浩先生	単元名「7 人のだいこん」 授業場面 クラス全員（7 人）が、それぞれ自分の畝に、大根を育ててきて、その大根を間引く際、どのように自分なりに決断して活動を作るかを考え実行する場面。
--	--

(2) 研究内容

自分の授業をよくするためには、まず、自分自身の今までの授業における問題点や不安と感じたことを素直に思い返してみることが大切ではないかと考えた。

- 畑で作物を作った。草取りとか水やりとかの活動を、子どもたちは進んでやらない。私はその様子を見てイライラする。また、畑で作物ができて、子どもが「先生何作るの？」とすぐに聞いてきた。何か、人ごとのようで、またまたイライラしてしまう。そんな姿をみて、私は、「子どもたちは、なかなか自主的に活動する力が弱い」と考えた。しかし、それは、もしかすると、子どもというより、自分に何か問題があるのではないだろうか？

- 何か料理を作っているときや野外での遊びをする活動では、子どもたちはとても楽しそうである。きっと子どもたちはその中で多くの事を学んでいると思う。しかし、その中で起きている学びとは何かよく分からない。だからこのような活動をする事を続けることに対して不安を感じる。

等、多くの事を子どもの姿から感じた。

そこで、今年度、本研究委員会では、

- ① 教師である自分が素材や子どもたちと、どのように関わり、どんなこと感じ・思い・考え、変化していったか。

- ② 子どもは、実際にどのように活動し、どのような動きを変化していったか。

の 2 点を、授業者の先生の記録や授業における子どもたちの姿から、生活科において大切にしたいとはいけない支援のあり方や学びのとりえ方について考えることで、テーマに迫っていきたいと考え、研究を進めて来た。

3. 研究の成果

(1) 研究授業から明らかになったこと

- ◇「友だちの様子をみながら自分の大根の間引きのやり方を考え、悩みながら自分なりの考えを持って、自分の行動を決断していく R 児」

R 児の姿	支援・子どもの姿から感じた教師の心情
「でっかいの抜きたい。でっかいの。家に持って行って食べるんだ」 一番大きそうな大根を 1 本抜いて友だちに見せに行く。	R 児は、混み合っている大根をみて、大きい物をぬけば、小さい物は、いずれ大きくなっていると思っている。子どもらしいな。
畝に戻り、もう一本大きな大根をみて、考えている。 「K 児は、小さいの抜いていたなー」	友だちの様子をみて悩んでいるな。混み合っている所をなんとかして、大きな大根を育てたいと思っているんだよね。
「大きな大根の隣の小さいのは、やっぱりじゃまかな？」 「M 児はたくさん抜いている。自分はどれくらい抜こうかな？」	自分の大根をどうするか、自分の決断に任せよう。

< 考察 >

R児は始め、大きな大根を1, 2本抜こうと考えていた。しかし、友だちのK児の様子をみて揺さぶられ、迷い、やはり自分の考え通り、大きい大根を1本だけ抜くことをきめたのではない。生活科において、自分の考えに揺さぶられ、決断する場面を設定することが、自分なりに課題解決していける子どもを育てることにつながったのではない。

1ヶ月後、混み合ったところの大根は太ったカブのような大根となったが、自分の大根を満足そうに収穫して、その大根について友だちと語るR児がいた。

◇「間引きをしながら、だんだん抜いた方が良さそうな大根が見えてきたK児」

K児の姿	支援・子どもの姿から感じた教師の心情
んー（大根をじっとみている） 「先生どうしよう」 S児が抜いた。 K児はその様子を見て、抜いてみた。すると「先生、小さいと思ったのに大きかった」 「抜けた」（2本目を抜く） 3本目、4本目と混み合っている大根の畝の中から、小さな物を選んで抜く。 言葉がなくなる。	前日、間引きのやり方を話してもらったけど、実際に抜くとなると困るみたいだ。 K児は失敗したと思っているかな？ 今度は小さかったようだ。 どれを抜くか、自分なりに分かったのかな。

< 考察 >

「間引きをする」このことは、子どもたちにとっては、どの大根も大きく育てて欲しいという願いがあるので、大きな決断の時であったようだ。だから、多くの子が、なかなか大根を抜こうとしない。K児は、祖父にも間引きの話を聞いていて、間引きが必要だと考えている。しかし、なかなかできない。また、「小さい大根を抜く」ということも知っている。しかし実際に土の中にある大根がどのくらいの大きさなのかは、子どもたちにとって予想がつかない。

K児は、S児の姿をみて、自分の願いを行動に移す力をもらったのではない。そして、やっと自分でも大根を抜く勇気が持てて大根を抜いた。これは、K児にとって大きな決断の時であった。また、抜いてみたら予想と違う大きさであったけれど、自分でやって見たことが次の活動への潤滑油となり、どんどん活動を広げたくなくなっていったのではない。加えて、抜きながらどんな大根を抜くかという実際の活動をしながら、少しずつ土の中の見えない大根が見えてきたとも想像できる。

子どもは、自分にとって思い切った決断や予想外の体験をすることで、次への活動をつくっていく力を持つことができるのではない。

（2）授業研究会から明らかになったこと（指導者の先生より）

- 単元が成立するまで、担任は大根を育てたいという思いがあった。しかし、地域の様子をみたり、夏以降に育てられるものを調べたりして、子どもたちとじっくり考え合いながら願いを醸成していった。子どもが自ら動く学習を成立するためにはすごく大切なことである。
- S児は、はじめ、小さい葉は、小さい大根と考えていたが、実際に抜いてみたら、小さい葉でも大きい大根であり、葉の大きさと大根の大きさは同じではないことを学んだ。やはり、生活科は、実際に経験することによって学ぶ教科である。
- 抜きたての大根を一口で食べて、「からい」といって走り回っていた子がいた。授業の中で、ねらいに向かった活動だけでなく、様々な体験や経験をしながら、子どもたちは学びを深めていく。教師はその姿を優しいまなざしでみて、評価していくことが大切ではないか。

4. 来年度への課題

（1）研究の成果から来年度の研究へつなげる課題

教師も子どもも自ら動き出したいような研究を今後も続けていきたい。

（2）研究推進や運営について

できる限り教材研究をしながら授業づくりができるように考えていきたい。